

イッカクと一角獣について

—生物学と民俗学の間で—

大賀 二郎*

はじめに

私の手許にイッカクの長歯一個がある。歯クジラ亜目イッカク科の前歯で、長さ181cm、先端部分が欠損している。重量は6kgである。

イッカクに類似した名称で、一角獣（原語はunicom）と呼ばれるものがある。伝承説話や絵画によく出てくる動物である。

イッカクが実在するクジラであるのに対し、一角獣は体の外形は偶蹄類・奇蹄類に似た四足の空想動物である。

両者の外形も全く異なっている。

共通点は両者の槍状の歯である。（ただし、イッカクの歯は犬歯で、一角獣のものは前額から伸びているもので角とみなされる。）両者とも槍状のものを顔面または頭上に具備している。イッカクの長歯には螺旋状の渦巻きがあるが、一角獣にも後期に登場したものは通常、同様の渦巻きがある。

一角獣は古代インドで誕生し、変容しながらアッシリア、ギリシャ、ローマに渡り、中世キリスト教社会で全盛を遂げた。

イッカクの長歯のイメージは、どこかで一角獣に取り入れられたに違いない。

イッカクは北極海付近に生息し、現代でも捕獲はもとより発見すら困難な動物である。極北とユーラシア南部の文明社会との間には果てしない不毛の永久凍土やタイガが広がり、中世以前は当然ながら社会から全く隔絶された地域であったに違いない。

イッカクの長歯が一角獣説話の素材となったとすれば、それはいつ、どのような経路で伝播されたのか興味ある点である。

小稿は生物学と民俗学の視点から、イッカクと一角獣の接点およびその因果関係を求めた。

生物学におけるイッカク

イッカクは学名 *Monodon monoceros*、英語名 narwhal で呼ばれる。前述のとおりカナダからヨーロッパ北部の北極圏に生息するが、近年その分布圏は北極の近くまで狭められた。貴重な動物でワシントン条約付属書Ⅱに指定されている。しかし、バフィン島北部のエスキモーに対しては、生活文化を維持するため年間一定数までの捕獲は許されている。

雄は体長6.5mに達し、うち2m前後の長歯がある。長歯は左上顎から成長する。雌は3.8m前後で長歯がない。体長は雌雄とも成体で背面黒褐色、腹面は白色で、境にヒョウ状斑点がある。

交尾はおもに4月頃、15ヶ月の妊娠後1子を出産する。

餌は甲殻類、軟体動物、魚類等である。しかし少なくとも素餌には長歯は用いていないとみられている。

伝承説話における一角獣

パキスタンのモヘンジョ・ダロの遺跡から人間や動物などを絵にした粘土タイルが出土している。そのなかに一角獣らしきものがある。ただ角は短くて牛の角ぐらい。体はサイに似ている。遺跡の年代からBC3000年頃と推測され、一角獣の始原とみることができる。当時、インドを中心としたこの地方は天竺国と呼ばれ、古代から一角獣が説話や絵に取り入れられていた。

BC300年頃、シリアのセレウコス1世からインドのチャンドラグプタ王に、使節が派遣された。外交官メガステネスである。彼は滞在中の見聞を『インド誌』として書き残した。ここでの一角獣は象に似て、尻尾はカールしている。特筆すべき点は始めて角に螺旋状の渦巻きを描いていることである。

同じ頃、インドからギリシャに伝えられたクテシアスの報告がある。このなかにインドの一角獣の話が伝えられている。馬のような白い髯。赤い頭。青い目。そして角は白、黒、紅の三色。性格は駿速で気が荒い。容易なことで捕えられないが、その角から作られた盃は盛られた毒を解毒する作用があるとされた。

旧約聖書にはヨブ記に関連した記述がある。re'emと呼ぶ野獣がいた。威厳があった。角で民のこごとくを突き倒し、地の果てに到ると。このときのre'emはヘブライ語聖書で一角獣(unicomis)と訳された。以後、キリスト教社会のなかでそのように伝承された。

当時の一角獣像はつぎのようなものであった。一角獣は最強の動物で、誰も捕獲することはできなかった。ただひとつの例外として、清純な乙女の胸のなかではその力を失うとされた。

一角獣伝説は中世キリスト教社会で頂点に達するが、16世紀トリエント公会議における偶像崇拜禁止宣言でその存在基盤を失うことになる。

教会では消滅したが、中世社会ではなお生き続けた。一角獣の角は王侯貴族の間で必需品であった。権謀術策

* 神戸国際交流協会国際部参事 博物館学芸員

の世、食卓の毒の検証にはなくてはならぬものであった。またある教皇は疫病から身を守るため金貨12,000枚を払ったという話もある。当時、一角獣の角というのはイッカクであったのか、他の動物の角であったのか興味ある点である。

いずれにしても、中世ヨーロッパでは、一角獣は、神秘、力、純潔の象徴とされてきた。現在のイギリス王家の紋章はライオンとユニコーンが盾を両側から支える図柄となっている。

一角獣は美術、文学の世界でも深く根を下ろした。ユニコーンと貴婦人を題材にしたタピスリーの絵画。一角獣が幽幻に語られているリルケの『マルテの手記』などが有名である。近年でも文学界の異色作家スタインベックが一角獣を題材に取り上げている。

一角獣説話によく似たもので一角仙人の物語がある。天竺波羅奈国に一角仙人と呼ぶ老修道僧がいた。人間と動物との混血で額に一本の角があった。仙人は雨の山道で足を滑らしたのに腹を立て、雨をもたらず竜と争い、竜を閉じ込めてしまう。おかげで世のなかは旱魃となり民は苦しむ。王命によって美妃が仙人の許に遣わされた。その容色により仙人の法力は骨抜きになる。竜は直ちに解き放たれ旱魃は止むという物語である。一本の角があること、竜と争うこと、美女に弱いこと、そしてインドの話であることなどを勘案すると、どことなく一角獣説話が下敷きになっているように思える。事実、どこかで接点があったのであろう。

日本における一角獣とイッカクの伝承

日本における一角獣の伝承は、すでに平安時代の『今昔物語』や『太平記』などで一角仙人やそれに類似した物語が中国あたりから伝わっていた。

中世ヨーロッパで定着した一角獣は説話や美術のモチーフとして江戸時代の日本に伝わった。同時に生物としてのイッカクの存在が日本に最初に伝えられたのも蘭学の移植のなかで行われた。物証はイッカクの長歯である。藩の典医を家系にもつ家ではイッカクの長歯が家宝として伝わっているところがある。

イッカクと一角獣の混合

一角獣の生成と変容の跡をたどり、またイッカクの存在がどのように影響していたか、要約するとつぎのようになる。

モヘンジョダロ遺跡から発見された一角獣の原型は、古代ギリシャ、ローマにも変容しながら伝わり、旧約聖書のre'em と呼ぶ野牛と結合し、ここで一角獣のパターンが形成された。中世ヨーロッパの精神社会に入ると、更に各種の伝承や説話を取り入れることになるが、一角

獣の外観は一定の姿で定着していた。

一角獣の角に螺旋のあることは、BC300年頃からみられていたが、この事実はイッカクが存在が何かのルートでつたえられていたのではないかと推測される。

一角獣の角が槍のように長大になったのも中世ヨーロッパにおいてである。すでにこの頃は、イッカクの姿がスカンジナビア半島周辺海域や北海・イングランド海域でしばしば発見されていたのではないかと推測される。

中世封建社会にあたっては、君主を始め特権階級は毒殺の危険にさらされていた。毒の識別や解毒方法が真剣に研究された。一角獣の神秘性や伝承された力がこれに利用された。そして解毒に決定的な効果を発揮するという一角獣の角は、はじめは野牛であり、続いてサイ、ゾウになり、最後にはイッカクの長歯が用いられるようになった。

おわりに

長大なイッカクの歯は強力な武器に見えるが、攻撃のためにも、防御のためにも用いられている気配はなく、もっぱら交尾期の示威行為に使われていることが観察されている。実用の面では全くの無用の長物で、かえって氷塊付近での行動には支障さえあるように思える。この長歯があるために一角獣説話に取り入れられ、自らが犠牲となる運命を背負った。

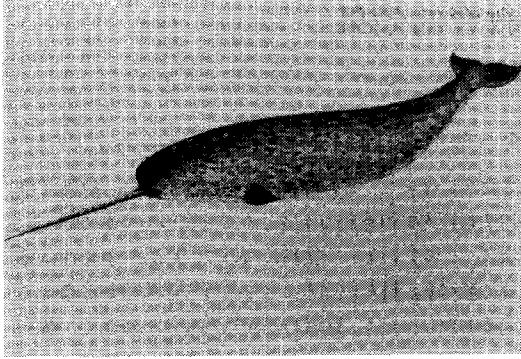
四足獣の頭にイッカクの長歯をつけた合成動物一角獣はイッカクに似ても似つかぬ姿であり、滑稽ですらある。一角獣にまつわる超自然的な力やその角に秘められた霊力は、イッカクから創出された幻影ともいえる。

生物史上、かつてみない雄大無比の長歯を発達させたイッカク。その遊泳する姿は北極圏の限られた海域でしか見られない。

その実影は、伝説の一角獣をはるかに超えて荘厳なものであろう。

参考文献

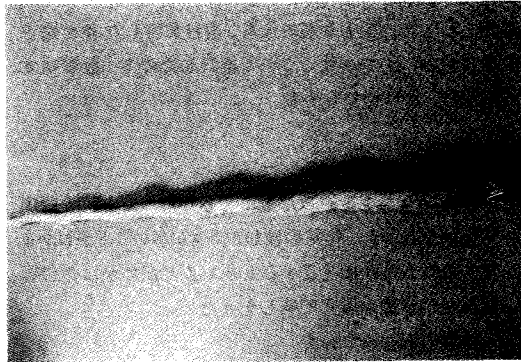
- 内田清之助 1961 原色動物大図鑑 北隆館
- 杉橋 陽一 1980 『一角獣の変容』 朝日新聞社
- ヘルベルト・ベント 世界動物発見史 平凡社
- 小原秀雄訳 1956 (AUF NOAHS SPREN)
- William Benton 1968 Britannica



イッカク (原色動物大図鑑 北隆館)



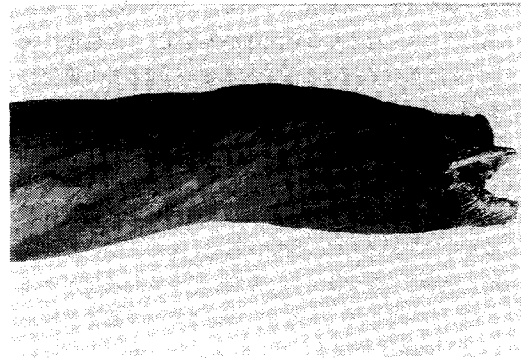
中世における一角獣絵画 (ブリタニカより)



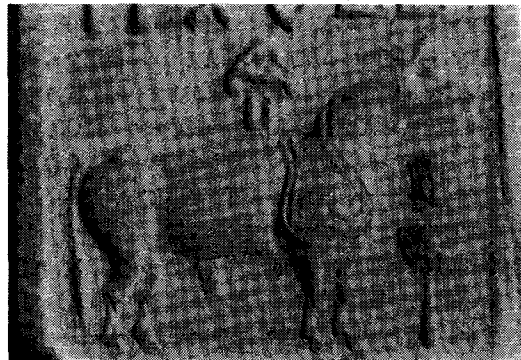
イッカクの長歯 (筆者所有)



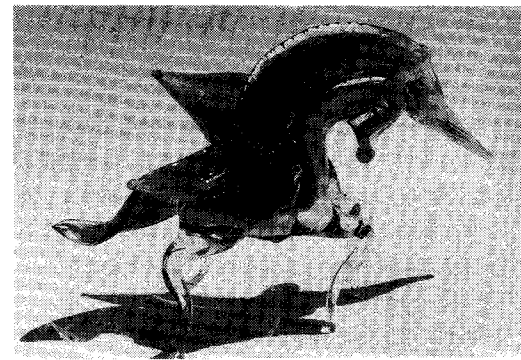
一角獣陶製 工芸品 (筆者所有)



同上 基部



モヘンジョダロ出土粘土板複製 (筆者所有)



一角獣と天馬の合成獣ガラス工芸品 (筆者所有)